

Title	近山金次氏提出學位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.142(582)- 144(584)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

近山金次氏提出學位請求論文審査要旨

主論文

「中世國家理念の生成とその展開」

參考論文

「ローマ帝國の變貌」

「西ローマ崩壞についての一考察」

本論文は、ローマ帝國の崩壞混亂の間に、キリスト教化されたヨーロッパ世界の出現する中世前期から封建王政の發展したその中期に至る時代の政治情勢を背景として、封建的な國家體制の成立した事情に關する研究である。「第一 秩序」「第二 國家」「第三 君主」の三部より成り、更に第一部を「新秩序の胎動」と、「舊秩序の崩壞」に、第二部を「封建國家の生成」と、「封建國家の組成」に、第三部を「封建君主論」と、「敘任權論」に、いづれも前後兩篇に分つてゐる。

要旨は、まづ第一に於て、ローマ帝國崩壞後の社會秩序を維持

したものは、個人的忠誠による服屬庇護の關係と、キリスト教精神の力によるものであり、共にやがて、新世界秩序の基盤となつたとしている。但し以上の關係は、國家の個人的性格を強め、メロヴィンガ朝よりカロリング朝に至つて、國家は依然として君主中心の個人的性格を失わないで、而も實質的には、統一的な國家構造の基礎を覆して、豪族の抬頭を招くに至つたことを述べている。そうしてその間に於ける官職制度の變遷を説き乍ら、土地所有權及び主權の分讓、特にプレカリウムとベネフィキウムとについての詳細な論述を試みた。

第二部では、封建制度の意義を論じ、封建的なものに對する著者独自の立場を明らかにして、封建國家が如何なる事情の下に發生し、組織されるに到つたかを論じている。殊に莊園の封建化されるに至る過程の論攻は、注意すべき業績である。其と共に著者は、封建國家に於ける王權・領主權の意義及び、其がヨーロッパ各國のおの独自の發達を遂げた情況を示し、特に忠誠誓約の變遷と、封土觀念の成立について詳論した上に、右封建國家の確立に、キリスト教精神及び教會勢力の、深く關與している事情と、それに關聯して、敘任權爭議の起つた理由、及びその經過に關する詳細な記述を加えている。

そうして第三部に入つて、國家理念の代表者たる封建君主の性格及び理論に觸れ、それを廣く中世の諸文獻に探ると共に、君主

觀念の發達過程を、時代情勢に結びつけて説いて居る。進んでは、以上の結果として當然起るべき、政教兩權の爭議即ち敘任權論争の經過を詳述している。そうしてその論争が、遂に兩權の妥協的結末に終つたことを明らかにし、結局、精神的權威の問題は別として、大局的には、地方的封建勢力の勝利に歸したと結論した。

以上主論文について最も注目すべき點は、著者の持する封建觀念である。一般に、「封建」の概念は「分裂」を意味することが多く、カルメットの意見の如きは、その代表的なものだが、著者はそれに對して、「分裂」よりも「統一」に重きを置き、莊園的な分裂の間より起つた、國家的統一を求める傾向を「封建」だとしている。従つて「封建」は莊園と對立するものであり、中世初期の社會的分裂と連結することなく、むしろ統一を求める國家的傾向と結びつくものとしている。本論文が、封建社會を主題とせず、封建國家を取上げたのも、以上の理由によるので、そこに著者独自の立場が示されている。要するに、著者の態度は、著しく政治又は軍事に向つていて、經濟的社會的でない。莊園と封建とが明らかに區別せられて居る上に、個人的忠誠による服屬庇護の關係に、重點の置かれたのも、本論文の特色とすべきものである。

固より、封建制度の全面的研究は、極めて困難な問題であり、それぞれ専門の立場より研究が進められなければならないが、こ

の著者の特色ある研究は、他の幾多の社會經濟史的研究と共に封建研究に寄與する所の多いものと言つてよい。なほ其の敘述に多少明晰を缺く點がないではないが、著者が如上の見解によつて、歴大な封建關係の史料及び文獻について研究に努めた點も亦、注目すべきである。著者はモヌメンタ・ゲルマニエ・ヒストリカを始め、ミニユその他の教會關係史料よりして、最近諸學者の所説をも参照し、批判している。殊に、カルメットの所説に強く反對して、ローの意見に賛成してゐる點や、トムソンの説を批判してゐる箇所など、注意に値するものである。又プレカリウムや、ホミニウムに關する詳細なる論述も、注目すべき研究と言つてよい。

以上の封建研究について、著者の努力は、更に敘任權爭議の問題に集注している。これは、封建國家の統一的性格を以て、キリスト教精神及び教會勢力と深く結びつくものとする著者の立場から來る當然の結果で、封建の問題は結局敘任權の問題へ發展するのであるこの問題に關して、著者は多くの教會關係の史料を驅使して、爭議の經過につき、詳細な論述を試み、結局敘任權爭議は、政教兩權の反目と言ふよりも、兩者の結合から起つた相剋に外ならないと斷じ、ドイツでは王權が世俗關係の問題に聖職者を引込んで、問題を紛糾させた爲に失敗したとし、王權はむしろ新興ブルジョアと結んで近代國家への推移に向ふべきであつたと論

じている。なほその敘述の間に、カールライルの所説に批判を加えた點が注目される。

次に參考論文として添えられた二篇の古代終末論は、いづれも古代ローマ帝國の崩壊に關するものである。

その内、「ローマ帝國の變貌」は、古代の傳統的國家理念が衰えて、キリスト教的國家理念に置きかえられる時代の政治的情勢を、コンスタンチヌス大帝の改宗事情に結付けて考察したものである。著者は、帝の改宗を全然政治的に解釋することを非とし、エウセビウスその他の典據によつて、帝の宗教的信念を改宗の動機として重要視している。そうして帝國再興の努力も、政治的軍事的には失敗に歸し、遂にキリスト教的ヨーロッパ世界の誕生となつたものとした。

第二の論文「西ローマ崩壊についての一考察」は、ローマ帝國崩壊の事情を、主として政治的軍事的破綻に求め、殊に軍事的事情に重點を置いてゐる。要するに此二篇は、封建研究の前提として、主論文と關係あるものであり、特に文化的經濟的見地よりも、政治的見解の主となつてゐる點で、主論文と同じく、著者獨自の立場を明らかにしたものである。

要するに本論文の主題は、極めて廣汎且つ困難な問題である爲、獨自なる著者の主張と、それに依つて展開された論述とに對しては、種々批判の余地のあることは固より考へ難くはない。ただ我

が國の學徒にとつて至難とされている西洋中世史料の驅使や、文獻批判に於て示した著者の努力は、その獨自の見解と共に、中世史研究の上に少からぬ示唆と貢獻とを與へるものである。よつて、著者は、文學博士の稱號を受ける資格あるものと認める。
昭和二十五年二月

主 査 委 員

- 慶應義塾大學 文學部 講師 西 洋 史 擔當 文學博士 大 類 仲
- 慶應義塾大學 文學部 教授 西 洋 史 擔當 文學博士 間 崎 万 里
- 慶應義塾大學 文學部 教授 比較言語學 擔當 厨 川 文 夫

松本芳夫氏提出學位請求論文審査要旨

主論文

松本芳夫著「古代日本人の政治思想」

本論文は、序説、第一章國土について、第二章人民について、第三章統治者について、第四章統治について、第五章國家について及び結語より成つてゐる。